

タマちゃんと満月

中村 優子

長男が幼稚園に入った頃、俗にいうイヤイヤ期とでもいうのでしょうか、我儘放題で私に叱られてばかりの時期がありました。周りのお子さんと比較すると、実際はそこまで酷い反抗期でもなかった様ですが、当時私は主人の転勤で仙台市に引っ越してきたばかり、周りに頼れる人もおらず、生まれたばかりの次男を抱えて必死だったのだと思います。母親としても細かすぎた部分もありました。

我儘を言つて叱られた夜は、自然と二人の反省会が始まります。私も叱りすぎたことを謝り、長男は何故我儘を我慢できなかったのかを反省します。夜になり冷静になると、あんなに叱らないでも良かったのにと、長男に対して申し訳ない気持ちになりました。長男は長男で、自分でもなぜいつも我儘ばかり言ってしまうのか不思議なようで、彼なりにその理由を考えるのに必死でした。そしてある晩、彼は自分なりの結論を出したようで、「我儘になった時はタマちゃんがくるんだよ」と面白いことを言い出しました。タマちゃんとは我儘になった時の自分の事で、我儘なのは僕ではなく、タマちゃんという子なのだと説明してくれました。本当の自分是我儘ばかり言いたくないという気持ちを、別人格のタマちゃんて表現したのでしよう。丁度その晩は綺麗な満月で、カーテンの間から明るい月の光が、どこかスツキリしたような息子の顔を、照らし出していました。私はふと息子の話を聞いて、狼男のお話を思い出しました。そこで、満月になるとオオカミに変身するオオカミ男のお話をして、満月には不思議な力があることを教えてあげました。すると彼は、タマちゃんが出てくる日も満月の日かもしれないねと、眠い目を擦りながらも真剣に考えている様でした。私は、「もしかししたら怒りすぎてしまうのも、満月のせいかもしれない。確かに月の満ち欠けは人間の体に影響を及ぼすと言うしね」と、そんなことを考えました。お互いに自分の悪い部分を満月のせいにして、その晩はいつもよりスツキリと眠りについたのです。

それからというもの、長男はタマちゃんが出てきた日の夜は必ず、「ママ、今日は満月の日?」と、その日が満月かどうかを気にするようになりました。不思議なもので、そう言われてみると、長男がひどい我儘を言う日は満月かそれに近い月齢のようでした。悪いことを満月が請け負ってくれるようになる、なんとなく気が楽になったのでしょうか、段々と叱ること、叱られることが少なくなつていきました。

月日は経つて長男は現在十二歳になりました。タマちゃんもすっかり現れなくなり、満月もお役御免となりました。それでも、私は満月を見ると必ずタマちゃんのことを思い出します。そして、とても懐かしく、少し寂しいような、でも温かいような不思議な気持ちになるのです。さて、タマちゃんはどこにいったのでしょうか。満月だけが知っているのかもしれない。